政治家と軍人についてのド・ゴールの認識
――ケン・ウィルバーの境界線概念を補助線としつつ――

駿　河　昌　樹

1　はじめに
2　政治家の本質
3　軍人の本質
4　政治家と軍人の共通点
5　政治家と軍人のあいだの齟齬
6　政治家と軍人の相互依存性

1　はじめに

歴史の転回点や動乱の時期を考える際、政治家と軍人それぞれの本質をあらためて峻別し直しておく必要を感じることがある。

もちろん、フランス革命戦争期にフランス軍の基盤を作ったラザール・カルノーLazare Nicolas Marguerite Carnot のように、工学者、数学者、軍人、政治家を一身に兼ね備えているような人物を前にすれば、政治家と軍人の本質を区別し過ぎること自体にも問題があると思われるし、17歳ではやくも式部官に選出されたクレメンス・メッテルニヒ Klemens Wenzel Lothar Nepomuk von Metternich-Winneburg zu Beilstein の事例などを見れば(1)、政治家と軍人だけでなく、官僚というものの本質や、官僚と政治家の間の関係もともに考慮しなければならないとも思わされる。

とはいえ、言葉としてはわかったつもりになりがちな「政治家」と「軍

人」について、シャルル・ド・ゴール Charles André Joseph Pierre-Marie de Gaulle が『剣の刃』*Le fil de l'épée, 1932*で行ったような本質論を一度は通過しておく必要はあるのではないか。

ド・ゴールによる考察が、あくまで20世紀前半の政治・軍事構造の枠内でのものという限界は忘れないようにしつつも、ここでは、彼による概念規定をもう一度整理して、政治や軍事の歴史のもろもろの場面の検討に役立つような視点を準備し直す試みをしておきたい。

2　政治家の本質

ド・ゴールによれば、政治家は、つねに世論を操作すべく努める存在ということになり、他の存在のしかたはあり得ない。世論の代表者という権威のみが政治家の力と価値を生むのであり、行動の源泉はここにしかないためで、世論の内実となるのは、君主、議会、国民の意見である。

こうした本質に照らして見えてくるのは、政治家というものが、自分自身以外のもののみを、自らの存在理由とも力の源泉ともしている姿である。いわば、ひたすら自分自身以外であろうとすることに政治家のレゾン・デートルはかかっており、自分自身であろうとすればただちに政治家性は消滅してしまう。その都度その都度の外部環境こそが政治家自身であり、自他の境界線の外に広がる外部環境のありように同化すべく変身し続けようとするところに、政治家の活動の本質がある。こうであるからこそ、政治家は、ド・ゴールによれば、「君主、議会、国民におもねり、説得をくり返して、彼らの情熱と関心を満足させ魅きつけていかねば」(2)ならなくなる。自らの政治思想やもともと持っていた主義に忠実であろうとしたり、昨日までの古い世論に誠実に対応し続けようとしたりすれば、政治家はその瞬間に政治家であり得なくなってしまう。

やや領域外とも見えそうだが、ここでトランスパーソナル心理学のケン・ウィルバーKen Wilber の用いた境界線概念を思い出しておくのも有

効かもしれない。

トランスパーソナル心理学のケン・ウィルバーは、一般に「悟り」と呼ばれることの多い状態を「至高のアイデンティティ」[3]と呼んでいる。これは、「何の疑いの余地もなく自らが全宇宙、すなわち高低、聖俗を問わず、あらゆる世界と基本的に一つであると感じること」[4]であり、「アイデンティティ感覚が心身というせまい範囲をはるかに超えて拡大し、全コスモスを抱擁するようになる」[5]瞬間である。これについての分析と考察の著作である『無境界』[6]で、彼は、「自己の境界線」や「自己／非自己の境界線」という概念を用いながら、意識のスペクトル内において、非自己が極小化ないしは消滅した段階を「至高のアイデンティティ」と見ている。

この際に用いられた境界線という概念をめぐって、彼はこのように記している。

「軍事専門家なら誰もが知っているように、境界線には戦線になる可能性が秘められている。境界線が領域を、戦いの可能性を秘めた二つの相対立するグループに分けてしまうからである。

たとえば、有機体全体のレベルにいる人は、環境を敵になる可能性を秘めたものと見る。ところが、自我のレベルにいる人は環境だけではなく、自分のからだも同様に異質な領域と見る。つまり、彼の相剋や混乱はまた違った性質のものなのだ。自己の境界線を移動させたために、相剋と個的戦争の戦線も移行したのである。この場合、からだが敵にまわってしまったのだ。

この戦線は、仮面のレベルできわめて顕著なものとなる。自らの魂の諸局面のあいだに境界線を引いてしまったために、仮面としての自分対環境、からだ、頭の諸側面のあいだに境界線を引いてしまったために、仮面としての自分対環境、からだ、頭の諸側面のあいだに戦線が生じるからである。

つまり、自らの魂に境界を設けると同時に、魂の戦いを生んでしまうのである。アイデンティティの境界は、宇宙のどの側面を『自己』ととら

え、どの側面を『非自己』ととらえるかを決定する。そのために、スペクトルの各レベルで、世界の異なったプロセスをよそ者と見るのである。かつてフロイトが指摘したように、よそ者はすべて敵に見える。そのため、個々のレベルはそれぞれ別個の敵と衝突する可能性を秘めているのだ。あらゆる境界線は戦線でもあり、そのうえ個々のレベルにおける敵はそれぞれ違うのだ。心理学の用語では個々のレベルから異なった『症状』が発生してくる、ということになる」(7)。

長く引用したのは、この叙述が、トランスパーソナル心理学上の境界線概念をめぐる考察でありながら、一般的に境界線というものが含み持つ性質の主要点を過不足なく押さえていると見えるからである。「軍事専門家なら誰もが知っているように、境界線には戦線になる可能性が秘められている」と記していることから、トランスパーソナル心理学におけるこの自己／非自己の境界線概念の創出は、軍事などの他領域で用いられる概念から刺激を受けた可能性が推察される。敵という概念も、もちろん、軍事における基本概念であるばかりか、ウィルバーが知らなかったはずのない、『政治的なものの概念』におけるカール・シュミット Carl Schmitt の敵概念を思い出してみれば、容易に政治学との連関も想定されてくる。むしろ、軍事や政治における概念と思考法を心理学に持ち込むことによって、ウィルバーの理論が構想されていったと見たほうがよいのかもしれない。

ウィルバーの用いる境界線概念に従ってみれば、政治家は、「何の疑いの余地もなく自らが全世論、すなわち高低、聖俗を問わず、あらゆる世論と基本的に一つであると感じる」存在であり、また、「アイデンティティ感覚が自己の心身というせまい範囲をはるかに超えて拡大し、全世論を抱擁するようになる」存在であると、容易にパラフレーズできそうである。世論の場において、自己／非自己の境界線を極力取り払って行こうとするところに、政治家の行動原理がある。

ウィルバーの言う「軍事専門家なら誰もが知っているように、境界線には戦線になる可能性が秘められている。境界線が領域を、戦いの可能性を

秘めた二つの相対立するグループに分けてしまうからである」というところは重要で、これを政治家に当てはめれば、戦線になる可能性のある境界線から、戦いの可能性を極力取り除いていこうとするところにも、政治家の活動の本質があると言えそうである。

政治家という存在の本体であり内実である世論というものの「気まぐれ」さ、どうしようもないほどの管理の不可能性については、ド・ゴールは再三の指摘を続けている。

「彼が世論の先を進めば世論は立ち止まるし、待機すれば、世論は彼を飛び越えていく。この世論という恩知らずは、無料で政治家の奉仕を手にせんと欲する。成功した場合でさえ、世論は野党の反対意見を悦に入って聞く。失敗すれば、罵倒し、打ちのめす」(8)。

さらには、「世論は有能な人物よりも可愛げのある人物を好み、実のある議論よりも浅薄な公約に魅かれる」(9)ので、「政治家の方もこれを魅了せんと秘術をつくし、時代に迎合して都合のよいことばかり語る」(10)ことになってしまう。この結果、「政権獲得のためとあれば、政治家は善良なる公僕を装い政敵と公約のせり売りをする」(11)に到る。

しかし、ここに到って、この一連の駆け引きの結果として、結局は世論のほうが征服される事態となってしまう。「政治家の陰謀と誓約の波状攻撃を受けて世論はついに征服され、彼に政権を授与する」(12)ことになる。

とはいえ、「宮廷の陰謀、閣内の策謀、議会の動向」(13)は、世論だけを自らの実質とも身体ともしている政治家からすぐにも権力を剥奪しうるので、どこまで行っても政治家は不安定な存在でしかない。「政治家はすべて権力の座と無力の座を、また、威信の座と石もて追われる座を往来する」(14)ものでしかない。

3　軍人の本質

ド・ゴールによれば、製造にあたっても大がかりであり、使用にあたっ

ても手間のかかる大きな「兵器を使用する職業」[15]である軍人は、軍隊組織とそれを支える国家組織によって支えられている存在である。組織がなければ軍人は存在できない。組織は、現実には、軍紀として軍人の前に現われ、その一挙手一投足を決定する。

「軍紀は軍人の短所を補い、長所を助長するが、逸脱、疑い、飛躍を」[16]許さず、「軍人の人間性を深奥部まで苦しめ、自由、金銭、そして、生命の放棄まで命」じ[17]、「完全無欠の犠牲を要求」[18]してくるものの、そのかわりとして、「軍人に力の支配者たることを許す」[19]。軍人が「耐えることに誇りを感じ」[20]、「重みに呻吟しつつも最善をつくして」[21]軍紀を守り抜くのは、得られる「力の領域（「支配力」や「権威」とも訳されうる）l'empire de la force」[22]に何ものにも替えがたい魅力が存するからである。

軍隊組織には「抜け駈けを頑として許さない」[23]厳格な身分制度があるが、この厳格さが万人に対して平等であるため、「常に目前に渇望して止まないもう一段上の地位と名誉がある」[24]と軍人たちには映っている。ここから、各級指揮官の権威の絶対不可侵性が発生する。厳格な軍紀にあわせ、長く続いてきた組織の伝統に支えられた権威の力もまた、部下に対する指揮官の威信を作り出し、部下から指揮官への信頼を支える。

政治家においては世論が自己の内実となっていて、そのゆえに政治家特有の動きが誘発されていたが、ドゴールの見地に立つかぎり、軍人の場合は、軍隊組織とそれを支える軍紀、さらに、やはり組織を支えるものである権威が、軍人の内実となっていると見てよいだろう。

ウィルバーの概念で確認しておけば、軍人は、形式的には非自己であるはずの軍隊組織とそれを支える軍紀や権威を自己とすることによってのみ、軍人であり得ることになる。ここから、「軍人気質と長年の規律生活により第二の天性と化した軍人の形式主義、断言癖、厳格さ」[25]が出てくることにもなる。

4　政治家と軍人の共通点

政治家と軍人、両者の本質を瞥見した上で、ウィルバーの観点を借りて眺めてみれば、両者に共通するところは明らかだろう。

自己／非自己の境界という点では、政治家も軍人もともに、本来非自己であるはずのものを自己とすることによってのみ、政治家であったり、軍人であったりしている。

政治家の自己の境界線は、世論に対しては取り払われている。あるいは、世論を自己の境界線の中にすっかり抱え込んだ上で、自己が作り直されている。軍人の場合、自己の境界線は、組織、軍紀、組織内権威に対しては取り払われている。あるいは、組織、軍紀、組織内権威を自己の境界線の中に抱え込んだ上で、自己が作り直されている。

境界線というものが、「戦線になる可能性」をつねに秘めているものであり、「領域を、戦いの可能性を秘めた二つの相対立するグループに分けてしまう」性質を持つものであるため、社会内で一定の役割を付与された存在は、役割が十全に機能するために必要となる要素を、自己の境界線の外に置いたままにしておくわけにはいかない。政治家と軍人の場合もそうで、自己の内実や自己の境界線の変容が前提とされてはじめて、政治家や軍人という存在が発生することになる。

これは、近代社会がその成立要件の前提とみなす個人が、一個体において内的に消滅することを意味する。ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel の用語とされる自己疎外 entfremdung は、精神や理念が自己を否定し、自己にとっての他者となることを意味するが、政治家や軍人の誕生にあたっては、これと同じ構造の内的他者化が発生しているといえよう。マルクス Karl Marx はヘーゲルのこの用語を発展させ、人間の作り出した経済・政治・宗教の諸条件に捉われて人間が主体性を失うことを自己疎外と呼んだが、ここに見られる政治家や軍人のあり方は、その端的な例で

あると言えそうである。

5　政治家と軍人のあいだの齟齬

こうした構造上の共通性があるのに加えて、協力しつつ「共通の事業」[26]に対処する存在どうしであるにもかかわらず、現実の場面では、政治家と軍人はたえず対立をしている。

この対立は、それぞれの本質が要請してくる行動様式の違いから発生する。

政治家の場合、「紛糾する事態に一歩距離を置き、それを複雑にとらえて策略と打算をもって」[27]解決しようとする。そのため、「先ず言葉を考え」[28]ることになるため、「不誠実、無節操、口舌の徒」[29]、あるいは「移り気、演出好き」[30]といった印象を与えることになる。自分が政治家として動けるようになるための権威を「民衆の好意に依存している」[31]ため、「人間を力量よりも世論に対する影響力によって評価する態度」[32]を崩さない。

軍人の場合は、「複雑なものを単純化し、身を挺し、決心さえすれば支配できるものと信じ込む」[33]ところがあり、なによりも「行動原理を捻出」[34]しようと努める。「厳しい任務、滅私奉公、任務貫徹を習慣づけられている」[35]軍人は、「単純明快な」[36]行動を旨とするため、政治家に特有の「まわりくどさ」[37]の対極にある存在といえる。

服従に慣れ親しんだ軍人とはいえ、それは軍隊組織の軍紀や権威に対してであって、政治家が構成する国家権力には「おいそれとは同意しない」[38]、とド・ゴールは指摘している。これは、軍人が目の当たりにせざるを得ない政治家の本質が、軍人の本質に照らしてあまりに違和感のあるものと映るためである。

6　政治家と軍人の相互依存性

政治家と軍人についてのド・ゴールの認識において、最も注目すべき点は、政治家と軍人がつねに相互依存関係にあり、どちらかだけでは存立しえず、定まった上下関係もありえないと見る点である。

『剣の刃』の内容となる講演は、陸軍大学での「ド・ゴールの意見を聞く会」でなされたが、この時点ではまだ政治家でなく、純粋に軍人であったド・ゴールは、「軍隊が敗北する時、いかなる政治が成功しうるというのだろう？」(39)とはっきり釘を刺している。

「軍隊を剥奪されたならば、ローマ帝国は、元老院の手腕をもってしてもなにもなし得なかっただろうし、王国軍がなければ、リシュリューやマザラン、ルヴォワなどになにができただろう。デュムリエがヴァルミーの戦いで敗北してしまっていたならば、フランス革命は揺籃期に息の根を止められてしまっていた」(40)。

ド・ゴールはこう述べ、「平和な時代の舞台の主役」(41)である政治家を優位に見ることを禁じている。「政府と軍司令部の役割がいかに異なったものであろうとも、両者の相互依存関係には議論の余地がない」(42)と断言している。

こうした政治家と軍人の関係は、ふつうは、「両者の自制心や愛国心」(43)によって、「極端な敵対関係に陥らないよう」(44)にされているものだが、国家の「危機がある限界を越えると、両者の激情が感情の歯止めを打ち壊してしまう」(45)ことがある。

そうして、もし、どちらかが優位に立つようなことになった場合には、「他方の無力化を意味」(46)することになってしまい、「両者の均衡が失われ」(47)、「秩序はみだれ、弾力は潰えてしまう」(48)。そうなると、「行動は支離滅裂となり、国家の破綻は駆け足でやってくる」(49)。

政治家と軍人の「相克が戦争の惨禍の直接の原因であり、彼らの相互憎

悪こそが不幸な戦争の原因」[50]であって、「戦争の歴史は平和な時代に始まる」[51]とさえ、ド・ゴールは言っている。

だからこそ、「お互いに理解の場を持つべきであり、協力していかねばならない」[52]が、あまりに「肌合いの違う者たち」[53]どうしであるため、「協調していくには叡智が必要である」[54]ということになる。

では、その「叡智」はどのように得られるのか。

『剣の刃』の一連の講演がなされた時代の思潮にもよるのだろうが、ド・ゴールは、なんらかの方法やシステムによって「叡智」が得られるといった見方をはっきりと否定している。

「軍人と政治家の相互理解を生み出す高い見識、つまり、最高の叡智は研究や法律だけによって獲得されるものではない。それは教育や命令ではいかんともしがたい直観力と人格の問題であり、また、天賦の才能や熟考能力の源泉である大役を果さんとする気魄の問題である」[55]。

彼によれば、「人間が最終的に頼りにできるものはそのような資質だけ」[56]であり、「偉大な人物の存在なくして、大事業は何一つ成就しない。そして、偉大な人物は偉大な人物になろうと欲したから偉大な人物となった」[57]と、この話題を締め括っていく。

先天的な才能に依拠した一種の天才主義的な言説と見えるが、しかし、このあたりをよく読み直してみれば、やはり、教育や環境の整備・調整の必要性を考えるべき余地が見つかりそうでもある。

「教育や命令ではいかんともしがたい直観力と人格」[58]や「天賦の才能や熟考能力の源泉である大役を果さんとする気魄」[59]が「叡智」を生み出し、「そのような資質だけ」が頼りになるのだとド・ゴールは言うが、「偉大な人物は偉大な人物になろうと欲したから偉大な人物となった」というところには、「欲する」ことを可能にするだけの環境の問題が入ってくるだろう。そもそも、成ろうと欲するような目標としての「偉大な人物」は、一個人の意識に、情報として入ってくる。そういう人物像を「偉大」と見なす価値づけは、大小を問わず、なんらかの社会集団の中でなされる

ものなので、そうした集団における価値論の設定のされ方が大きな影響力を持ってくることになる。

優秀な軍人であったド・ゴールは、軍事の現場での経験から、「教育や命令ではいかんともしがたい直観力と人格」や「天賦の才能や熟考能力の源泉である大役を果さんとする気魄」を重視する「資質」絶対論を練り上げていったものと思われるが、「資質」が十全に開花するまでの段階については、後世の人間がもう少し細かく検討を加え得る余地が残されていると見ておくべきだろう。

注

(1) クレメンス・W・メッテルニヒ『メッテルニヒの回想録』（安斎和雄監訳／安藤俊次・貴田晃・菅原猛共訳、恒文社、1994）、p. 22。

(2) Charles De Gaulle, *Le fil de l'épée* (1932), Perrin, collection tempus, 2015, p. 122. 邦訳としては、小野繁訳『剣の刃』（蘆書房、1993）がある。達意の訳であるため、本稿での引用文は、基本的にこの翻訳に依った。が、必要に応じて変更した箇所もある。

(3) ケン・ウィルバー『無境界』（吉福伸逸訳、平河出版社、1986）、p. 13。原書は Ken Wilber: No Boundary, ShambhalaPublications Inc., 1979. 本稿では吉福訳の邦訳を使用した。

(4) Ibid., p. 13.

(5) Ibid., p. 13.

(6) Ken Wilber: *No Boundary,* Shambhala Publications Inc., 1979。邦訳はケン・ウィルバー『無境界』（吉福伸逸訳、平河出版社、1986）。

(7) Ibid., pp. 26–27

(8) Op. cit., pp. 122–123.

(9) Ibid., p. 122.

(10) Ibid., p. 122.

(11) Ibid., p. 122.

(12) Ibid., p. 122.

(13) Ibid., p. 123.

(14) Ibid., p. 123.

(15) Ibid., p. 123.

(16) Ibid., p. 123.

(17) Ibid., p. 123.
(18) Ibid., p. 123.
(19) Ibid., p. 123.
(20) Ibid., p. 123.
(21) Ibid., p. 123.
(22) Ibid., p. 123.
(23) Ibid., p. 123.
(24) Ibid., p. 123.
(25) Ibid., p. 125.
(26) Ibid., p. 124.
(27) Ibid., p. 124.
(28) Ibid., p. 124.
(29) Ibid., p. 124.
(30) Ibid., p. 124.
(31) Ibid., p. 124.
(32) Ibid., p. 124.
(33) Ibid., p. 124.
(34) Ibid., p. 124.
(35) Ibid., p. 124.
(36) Ibid., p. 124.
(37) Ibid., p. 124.
(38) Ibid., p. 124.
(39) Ibid., p. 122.
(40) Ibid., p. 122.
(41) Ibid., p. 121.
(42) Ibid., p. 121.
(43) Ibid., p. 133.
(44) Ibid., p. 133.
(45) Ibid., p. 133.
(46) Ibid., p. 133.
(47) Ibid., p. 133.
(48) Ibid., p. 133.
(49) Ibid., p. 133.
(50) Ibid., p. 126.
(51) Ibid., p. 126.

(52) Ibid., p. 126.
(53) Ibid., p. 126.
(54) Ibid., p. 126.
(55) Ibid., p. 145.
(56) Ibid., p. 145.
(57) Ibid., p. 145.
(58) Ibid., p. 145.
(59) Ibid., p. 145.